

外国人看護師受け入れは進むのか

日本インドネシア経済連携協定(EPA)で、看護師候補者が来日している。そのインドネシアへ、高崎健康福祉大学看護学部の学生たちが国際看護研修に訪れた。インドネシアの医療現場とはどのような場所なのか。また、東京で行なわれた国際看護研究会学術集会でも、インドネシアからの看護師受け入れ施設の取り組みが大きく取り上げられた。

■インドネシアの医療現場を日本の看護学生たちが視察

2009(平成21)年9月、高崎健康福祉大学の看護学生16名が国際看護研修のためにインドネシアへ向かった。同大学看護学部では、4年前からジョグジャカルタにあるステカス大学看護学部との交流を深めている。看護学生の交流や国際的視野をもった看護者の育成などを目指しているという。今回は、看護教育施設、病院、保健所(ブスケスマスとよばれる地域の一次医療

拠点)見学や交流が目的である。

日本にはいま、インドネシアとのEPAにより看護師候補者が第1陣104名、第2陣は173名来日し日本での資格取得をめざしている。その一方で、受け入れる側のわれわれはそうした候補者たちが自国でどのように働いているのか、その実情を十分に知っているとはいえない。そこで両国の看護の違いに興味を抱く看護学生たちに同行してインドネシアを訪れた。

移転したばかりの近代的なステカス大学ジョグジャカルタ校を一周すると「○○Labo」という表示が多いことに気づく。「演習室が多いのが印象的」と、ある学生は感想を述べた。インドネシアの看護師のなかで最も人数の多いD3(3年課程)のカリキュラムでは、演習時間は日本よりかなり多くとられているという。そのD3を育成している。同大学では語学(英語)修得にも力を入れており、語学専用の演習室もあった。実際に図書館内の約30%は英



パネムバハン・セノパティ病院の看護師

語の書籍だ。

看護学部の施設見学のあとで向かったのは、ジョグジャカルタ市内のジョグジャ・インターナショナル病院(Jogja International Hospital)。空港にも近く、最新設備の整った193床の私立病院である。20の診療科を有し、外国人や裕福層をターゲットにした病院だ。ロビーには静かでゆったりとした空気が流れていた。病棟内もとても静かだ。その理由を聞いてみると、ベッドの稼働率は約40%という。看護配置は平均すると4対1と手厚いため、ナースステーションにも殺伐とした雰囲気はない。病棟看護師は3交代制で、午前と午後には個室の患者の状態をチェックしたり、薬をセットして病室へ届けたりする。そしてベッドサイドには、患者を取り巻くように付き添う家族の姿があった。

翌日は、パネムバハン・セノパティ病院(Panembahan Senopati Hospital)を視察した。こちらの病院は、2006(平成18)年のジャワ中部地震の際に津波で大きな被害を受けた地域、バントウルにある国立の総合病院である。インドネシアも、他の東南アジア



ステカス大学看護学部を見学する学生たち

インドネシアへの国際看護研修と 国際看護研究会学術集会から

の国々と同じく、高級私立病院は閑散としているのに対し、国立病院は人でごったがえしていた。

しかし、混み合っているからバタバタしているかといえばそうでもなく、お国柄というべきか、緊張感でピリピリしているわけでもない。待合室に人があふれていてもなんとなくのんびりした雰囲気であった。採血専門の看護師がいるなど、仕事は細分化されている印象だ。

ここで学生たちが注目していたのは新生児の着衣。インドネシアでは、新生児をまるで「糞虫」のように、手足が出ないように布でぐるぐる巻いている。

バリ舞踊を踊る際にきれいに伸びるようという説明があった。新生児室を見ていた学生が「コットが少ない」「日本なら保育器に入っているような子が、普通に寝かされている」と思わずつぶやく。また、手術室の前まで見学に行ったが、すぐに開いてしまう扉の向こうで手術が行なわれている状況にも、驚きの声が上がっていた。医療レベルというより文化や習慣、物品の有無によって、看護の仕事は異なることを実感できた。

今回の国際看護研修を企画し、引率をした高崎健康福祉大学看護学部の芝山江美子教授は、インドネシアで3年間の看護経験があり、またその後もインドネシアでの「母と子の健康手帳



デヴィさんは日本語で発表



206名が参加した国際看護研究会第12回学術集会

プロジェクト」に2年間携わってきた。研修を終えて「インドネシアの看護は10年前とあまり変わらない印象です。インドネシアと日本では看護に対する考え方も方法も異なる部分が多い」と述べた。研修に参加した学生のなかからも、帰国後「教育があっても実践に移すのは難しいと分かった」という感想が聞かれた。

今回視察したのは、ほんの一部の病院にすぎない。インドネシアから看護師候補者がすでにやってきている状況のなか、受け入れ施設側にはインドネシアの看護事情についての情報が不足しているという。今後より活発な交流と情報交換が必要となってくるだろう。

■外国人看護師受け入れのための ワークショップ開催

さて、高崎健康福祉大学一行がインドネシアから帰国した翌日の9月12日、東京では国際看護研究会第12回学術集会が開かれていた。参加者は昨年より80名増え、200名を超える国際看護に興味のある看護師や看護学生たちが集まった。

「国際看護教育」の枠内で、高崎健康福祉大学のステカス大学との取り組み

の報告、外国人看護師受け入れの現状についての発表のほか、ワークショップでは、「日本で外国人看護師と働く」というテーマで、情報共有がなされていた。

一般演題で「奈良医大における外国人看護師候補者受け入れ努力と課題」の口演を行なった奈良県立医科大学医学部看護学科の勝井伸子講師は、インドネシア人看護師候補者への日本語と看護専門教育の現状を発表したあとで、各受け入れ施設がバラバラに試行錯誤をするのではなく、単語表などはインターネットでデータベースをつくり、みんなで共有していける仕組みづくりなどを提案した。

続いて「外国人看護師受け入れ病棟の現状」について、奈良県立医科大学附属病院の橋田由紀看護師は、インドネシア人看護師候補者にアプローチしていくうえで、絶対的に必要なインドネシアでの看護の位置づけや概念の違いについての情報提供がなく、情報収集手段も不足しているため、相互理解が困難であることを述べた。

インドネシアの医療背景に対する情報提供も少ないなかで、支援が施設任せになっていることへの不満の声は依



新生児は布で巻くのがインドネシアのスタイル

然として大きい。橋田氏は、このままでは、施設側の負担もさることながら、看護師候補者の意欲の維持にも限界があると述べて発表を締めくくった。

ワークショップ『「日本で外国人看護師と働く」：現場の声から聴き取れること』には、東京・永生病院の法人事務局相談役で、採用担当でもある宮澤美代子氏と、同病院で勤務しているインドネシア人看護師候補者のデウィさんが、スピーカーとして壇上に上がった。宮澤氏が同病院での受け入れ状況や課題を報告したあと、デウィさんが、第1陣の看護師候補者として来日してから1年経った心境を日本語で発表。両国の看護の違いについて、インドネシアの看護師は薬剤のセッティングをするが日本ではそれは薬剤師の仕事であること、また、日本の病院は入院期間が長いことなどを挙げた。そして彼女にとっての最も大きな問題は看護師国家試験で、「もっと準備期間を伸ばしてほしい」「もう一度仲間と一緒に勉強する機会がほしい」と訴えた。

会場からは、受け入れ病院の教育に対する質問に加え、デウィさんに対しても、看護の差異に関する質問が飛び交った。

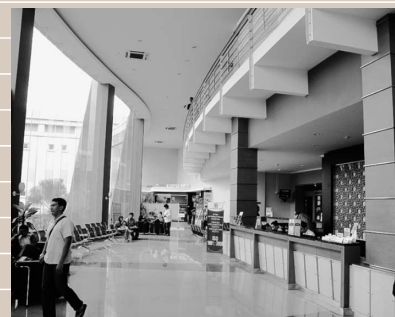
■看護の国際協力なのか、

労働力受け入れなのか

従来なら、看護における国際協力に関する演題が並ぶ本学術集会に、EPAでの外国人看護師受け入れに関する演題が取り上げられ、ワークショップが行なわれていたことから、この問題に対する関心の高さが伺える。しかしよく考えてみると、そもそもEPAは二国間の経済に関する協定である。日本が車や電子機器などをインドネシアに輸出する際の関税が撤廃されるかわりに、インドネシア側は日本に輸出するバナナやえび、林産物などの関税撤



ステカス大学ジョグジャカルタ校



ジョグジャ・インターナショナル病院ロビー。ガムランが静かに流れていた



見学する日本からの学生を見学(?)に集まった学生たち(ステカス大学)



人でごったがえすパネムバハン・セノパティ病院ロビー

廃のほか、日本への看護師や介護福祉士の派遣を求めてきたものだ。

受け入れ施設側の受け入れ理由には、「国際交流」「受け入れによる院内活性化」なども挙げている。しかし、多くの病院で「将来の看護師不足を見据えて」という期待があることも事実だ。

国際協力としての受け入れであれば、施設が費用負担して日本語教育を行ない、日本人と同等レベルの給与を払って、なおかつ3年で国家試験合格が無理であれば帰ってもらっても全く構わないはずである。しかし経営的な環境の厳しい今の状況で、本当にそれだと思っている施設がどれだけあるだろう。

日本の経済振興のためなのか、労働力の海外派遣による外貨収入に頼らざるを得ないインドネシアに対する国際協力なのか、それとも本当に外国人労働

働に頼らなければいけないほど日本人の看護師が不足しているのか。国の方針もはっきり提示されないままに、ここまでできてしまったEPAによる外国人看護師の受け入れ。結局、経済振興のために、医療現場に混乱が起きてしまったかのような印象さえ受ける。そしてさまざまな立場から期待していた誰もが、幸せではないような気配が漂っている。インドネシアからの第2陣も来日するなか、「日本に来た彼らが、来てよかったと思えるように」という合言葉のもと、試行錯誤はこれからも続く。

●神保康子